

# 普通体応答における「だ」の有無

—日本語教育文法として「だ」は省略は妥当か—

森篤嗣 (武庫川女子大学)

## 1. 問題提起

本稿で主として考察対象とするのは、(1) や (2) のような話し言葉の普通体において応答として用いる「ナ形容詞語幹単独用法」である (以下、「ゼロ形」)<sup>1</sup>。「だ」が付く形 (以下、「ダ形」), 「です」が付く形 (以下、「デス形」と比較してみる。

### (1) (ケーキを作る道具について話をしている場面で)

妻: 今度、料理用の秤、買おうかな。ちゃんとね。

夫: そして、お母さんはそれを実行するのに何年かかることやら。

妻: うん、大丈夫 {φ/??だ/?です}。最近、いいお店見つけたから。

(CEJC : K004\_011)

### (2) (旅行について話をした場面の後で)

男: 俺はもう仕事なんで (うん) 忙しさのピークなんで。

女: お茶、淹れよっか。

男: そう。いやー、別に大丈夫 {φ/??だ/?です}。

(CEJC : T021\_003)

三枝 (2001) では、ナ形容詞とはほぼ同じ振る舞いをする名詞述語による文末について、「だ」が用いられるのは「自分に向けた発話」と「他者目当ての発話」があるとし、後者は男性だけが使うとしている。確かに (1) は、女性の発話であるため「だ」の使用に強い違和感があるとも取れる。しかし、(2) は男性による「他者目当ての発話」であるが、「だ」がない方が自然だと思われる。

もちろん、文末の「だ」は女性が使うよりも男性が使う方が自然であるという傾向は先行研究で多くの指摘があり、ある程度認められている。しかしながら、(1) と (2) で示したように、話し言葉の普通体においてナ形容詞の肯定応答として用いる場合には、女性が使いにくいのはもちろん、男性にも使いにくい場合もある。そうであれば、話し言葉の普通体においては、ナ形容詞はゼロ形、すなわちナ形容詞語幹単独用法が無標であるとした方が妥当ではないだろうか。

<sup>1</sup> 用例は『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation (以下、CEJC)) による。IDのうちアルファベットで始まる前半は協力者ID、後半はセッションIDである。

<sup>2</sup> 既に荘司 (1992:44) において、ナ形容詞文と名詞文共にゼロ形が普通体に当たるという主張がされており、本稿はこれに倣う形になる。また、李 (2012) は三枝 (2001) の「他者に向けた発話」を「丁寧さのカテゴリ内の発話」とし、デス名詞文を「丁寧体」、ゼロ名詞文を「普通体」、ダ名詞文を「威圧体」と位置づけており、ゼロ形を無標と位置づけている点、ダ形に付加的な意味を与えているという点で本稿の主張と重なる。さらに、ナ形容詞のゼロ形は基本形から活用語尾

この主張は日本語教育文法として扱う場合に意義を持つ。『みんなの日本語初級 I 第 2 版』では、練習 A でナ形容詞の丁寧形「きれいです」に対し、普通形「きれいだ」という体系を提示している（スリーエーネットワーク 2012:172）<sup>3</sup>。つまり、形態論としてはダ形を無標として認めている。その一方、例文（p.170）として「今、暇？—うん、暇。何？」や、練習 B（p.174）として「元気？—うん、元気。」のようなゼロ形による応答を掲載している。このように、ナ形容詞の普通体の導入においては、会話における応答を典型例としてゼロ形を示している。

なお本稿では、文体としての「普通体」と、形態論としての「普通形」は分けて考える。日本語教育において「普通形」の導入は、「○大丈夫だけど/×大丈夫けど」や「○大丈夫だと思う/△大丈夫と思う」という従属節内での使用する形を教えるためにおこなわれる。したがって、活用体系として「ナ形容詞の普通形はダ形である」という説明は必要である。しかし話し言葉における「普通体」については、少なくとも初級の初出時においては、ゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱うことを明記すべきであることを主張したい。

## 2. 日本語教育における「だ」の扱い

多くの日本語教師にとって、普通体応答において「名詞+だ」と「ナ形容詞語幹+だ」については、「だ」を省略するという説明は、半ば常識であると言って過言ではない。しかし、それは経験的説明とも言えるもので、日本語文法解説書を見てみると、それほど一般的な説明であるというわけではない。例えば、庵ほか(2001:503)では「ダ体」として「名詞+だ」と「ナ形容詞語幹+だ」と省略されない形が示されている。一方、日本語記述文法研究会(2009:205)では「ジェンダーによる文体差」として、男性語では「学生だよ」「大丈夫だよ」となるところが、女性語では「だ」が省略されて「学生よ」「大丈夫よ」を示しているが、普通体との関係が明示されているわけではない。

そうした状況の中、『みんなの日本語初級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク(2005:200-201)及び『みんなの日本語初級 I 第 2 版 教え方の手引き』スリーエーネットワーク(2016:174)では、明示的に「だ」の省略を扱っている。

### (3) 練習 1 丁寧体を与えて質問と答えを作らせる。

例 1 T : 元気ですか → S 1 : 元気?

T : はい → S 2 : うん、元気。

スリーエーネットワーク (2005:201)

まず、(3)は初版の練習問題である。タイトルは「「だ」の脱落」で、別箇所の解説に「な形容詞や名詞の疑問文においては、「です」の普通形「だ」が省略される。また肯定の答えの場合、「だ」の言い切

---

「な」が脱落した形とみなすことにはできる。これは形態的には今野(2012)などで指摘されるイ形容詞の「イ落ち表現」に対応することとなる。同様の現象について、富樫(2006)では「形容詞語幹単独用法」、清水(2015)では「形容詞語幹型感動文」と呼んでいる。

<sup>3</sup> 名詞についても練習 A で丁寧形「あめです」に対し、普通形「あめだ」を体系として提示しているが、こちらはナ形容詞とは異なり、問題(p.177)で「あの人は結婚している？—うん、独身だ」のようなダ形による応答を掲載している。

りは強く響くので、「だ」を省略したり、終助詞「ね」「よ」をつけたりして語調を和らげる。女性は「～だ」の言い方をほとんどしない」という説明がある。

- (4) あした、 ひま？  
…うん、 ひま。  
…うん、 ひまじゃない。

スリーエーネットワーク (2016:174)

次に(4)は、第2版の例文である。タイトルは「な形容詞文／名詞文の普通体会話」で、「普通体のやりとりを導入する。質問文は「だ」が落ち、答える場合も「だ」をあまり使わないことを示す。「あした、暇？」「うん、暇」などの簡単なやりとりで「だ」が落ちることを確認する」という説明がある。「女性は「～だ」の言い方をほとんどしない」という記述が削除されていることがわかる。

さて、このときの「簡単なやりとり」とは何を指すのだろうか。それが「質問文も応答も短い」ということを指すのだとすれば、それは適切ではない。コーパスによる実例では質問文が長いことは多々あり、応答も「ただ八時間九時間は寝てるから大丈夫 (CEJC:K002\_017)」など長くなることもある。

以上、本稿で取り扱う普通体応答における「だ」の有無に対するスリーエーネットワーク (2005:200-201) 及びスリーエーネットワーク (2016:174) の解説は非常に示唆的なものであり、日本語学に基づく文法解説書よりも实际的であると言える。これを日本語文法研究の立場から提言できていないのは非常に口惜しい。日本語教育文法という観点からすると、日本語学習者の理解という点では普通体応答の「だ」は男女問わずあり得るということを抑え、なおかつ「簡単なやりとり」でなくても多用される事実があるということ、コーパスで検証することは責務なのではないか。

コーパスによる検証の結果、「少なくとも普通体応答に限って言えば、男女問わずゼロ形で返せば問題ない」ということであれば、普通体の導入時に提示される応答に関して言えば、「だ」は省略できる」ではなく「ゼロ形が無標」とした方が習得にも誤用回避にも有効な記述ではないだろうか。本稿ではこの点を改めて検証していきたい。

### 3. 使用データと全体の傾向について

データとして CEJC と J-TOCC を用いた。CEJC は国立国語研究所による日本語日常会話を収録したコーパスで、個人密着法で 185 時間、特定場面法で 15 時間の計 200 時間を収録している。J-TOCC は、話題が語彙・文法・談話ストラテジーなどに与える影響を検討するためのコーパスである。5 分ごとと 15 話題について 120 ペア、合計 150 時間の会話が収められており、およそ 11 万語に相当する。ペアは性別の組み合わせや録音地の東西でバランスをとったコーパスである (中俣ほか 2021:11)。

まず CEJC で検索したゼロ形・ダ形・デス形等の分布を検討する。コーパス検索ツール「中納言」を用い、「発話単位末」を基準として「形状詞一般」と「名詞・普通名詞一般／形状詞可能」のゼロ形、ダ形、デス形に加え、終助詞が付与されたダヨ形、ダネ形、デスヨ形、デスネ形も検索した<sup>4</sup>。その際、

<sup>4</sup> 形状詞は「形状詞一般」の他に「形状詞助動詞語幹（「そう」「みたい」など）」と「形状詞タリ（「満々」「爛々」など）」

形状詞及び助動詞「だ」は活用形を終止形に限定した。

表1 CEJCにおけるゼロ形・ダ形・デス形等の分布

	ゼロ形	ダ形	ダヨ形	ダネ形	デス形	デスヨ形	デスネ形
ナ形容詞	2,305	414	319	209	350	87	71
名詞	19,937	1,108	1,010	571	604	256	518

CEJCの「発話単位末」は、疑問か応答かの区別がつかない。ナ形容詞のゼロ形をランダムに50件調べてみたところ、疑問は7件だった。したがって、ナ形容詞のゼロ形は実際には14%ほど少ないと見られる。名詞のゼロ形についてはあまりに多様な出現があり得るため、参考程度の数値とみて欲しい。それでもダ形に比べてゼロ形の使用がかなり多いことは見て取れる。なお、CEJCは普通体が多いが、若年層のみで取得したJ-TOCCに比べると比較的丁寧体も出現する。

次にJ-TOCCでのゼロ形・ダ形・デス形等の分布を検討する。コーパス検索ツール「J-TOCC\_kwic.ipynb」を用い、句点「。」を基準としてCEJCと同様の形式の検索をおこなった<sup>6</sup>。ただし、検索ツールの都合上、形状詞及び助動詞「だ」は活用形を終止形の限定はおこなわず、同条件を手作業で再現した。

表2 J-TOCCにおけるゼロ形・ダ形・デス形等の分布

	ゼロ形	ダ形	ダヨ形	ダネ形	デス形	デスヨ形	デスネ形
ナ形容詞	1,781	239	122	93	48	5	19
名詞	11,404	159	245	219	307	43	92

J-TOCCは、句点「。」で検索しているため、疑問と応答の区別はできており実数に近いと見て良い。J-TOCCは比較的仲の良い大学生ペアの会話を収録しているため、かなり普通体に偏っている。ここでもゼロ形の使用はダ形を圧倒している。

#### 4. CEJCにおける出現上位語の傾向について

本節では、ナ形容詞や名詞のうちどのような語がゼロ形、ダ形、デス形それぞれで使われているのかについて、ややコーパス規模の大きいCEJCを用いて見ていく。

表3 CEJCにおけるナ形容詞頻度上位10件<sup>7</sup>

	ゼロ形	ダ形	デス形	計

があった。

<sup>5</sup> 西日本方言では、ダ形の代わりに「形容動詞語幹+や（以下、ヤ形）」が使われることがある。CEJCでは、ナ形容詞のヤ形は全体で18件、名詞のヤ形は114件あった。ここでは影響は軽微なものとして論を進め、東日本話者と西日本話者が半数ずつに統制を取ったJ-TOCCで改めて検証することとする。

<sup>6</sup> 中俣尚己氏作成。2024年6月16日現在では非公開。

<sup>7</sup> BCCWJの品詞分類では形状詞一般ではあるが、ダ形やデス形で使いきくい「そんな(173)」を除いた（括弧内は合計頻度）。「そんな」のダ形とデス形は0件だった。

大丈夫	804▲	29▽	251▲	1,084
嫌	41▽	307▲	8▽	356
大変	120	38	5▽	163
好き	126▲	5▽	6▽	137
同じ	93▲	2▽	0▽	95
まじ	70▲	5▽	13	88
確か	76▲	1▽	1▽	78
大事	71▲	1▽	0▽	72
奇麗	57▲	2▽	2▽	61
可哀想	54▲	2▽	0▽	56

表3の10種類のナ形容詞についてカイ二乗検定をおこなったところ、ゼロ形、ダ形、デス形の出現数間に偏りが認められた ( $\chi^2(18)=1551.663$   $p<.01$ , Cramer's  $V=0.595$ )。残差分析の結果も示した。

ここで非常に特徴的なのが「嫌だ」である。CEJCでは語彙素「嫌だ」307件のうち266件が「や」、41件が「嫌」と文字化されている。「や」と「嫌」の文字化精度は不明だが、1モーラの「や」が多数を占めることから「や。」よりも「やだ。」の方が安定することからダ形が優先して使用されると思われる<sup>8</sup>。ゼロ形を無標とする原則より形態的特徴を優先するというこの現象は、金水(2023:43)の「断定の「～だ」は、それ自体としては話し相手へのコミュニケーション上の効果を持つような要素ではない」を裏付けるものと言えるかもしれない。

表4 CEJCにおける名詞頻度上位10件<sup>9</sup>

	ゼロ形	ダ形	デス形	計
本当	1,157	331▲	3▽	1,491
駄目	277▽	149▲	36▲	462
嘘	262▲	10▽	2▽	274
無理	107	22	14▲	143
一杯	81▲	5▽	0	86
普通	68▲	1▽	2	71
終わり	52	4▽	6▲	62

<sup>8</sup> イ形容詞に名詞化接辞「め」が後接するとき、通常は「イ形容詞語幹+め」となるが、語幹が1モーラの「濃い」では「濃いめ」より「濃いめ」が好まれるという現象と類似していると言える。また類似した形式として、副詞「そう」+「だ」や、イ形容詞+ナ形容詞型助動詞語幹「そう」(例「おいしそう」)もある。ゼロ形「そう」15,090件に対しダ形「そうだ」543件でダ形出現率3.47%、語幹1モーラに限れば「そ」1,860件(うち30件は助動詞語幹)に対し「そだ」15件でダ形出現率0.80%と、副詞「そう」については語幹1モーラで「そだ」が好まれるという傾向はなさそうである。

<sup>9</sup> BCCWJの品詞分類では名詞ではあるが、単独で使いにくい名詞「事(930)」「奴(741)」「感じ(622)」「訳(517)」「人(468)」「所(170)」「子(150)」「辺(79)」「家(69)」「会(66)」「茶(63)」「下(59)」「物(43)」「半(53)」「語(52)」, 人への呼びかけとして使われている名詞「ママ(153)」「先生(142)」「パパ(84)」, 決まり文句や機能語の一部「御免(352)」「御覧(51)」を除いた(括弧内は合計頻度)。

無し	44▲	0▽	4▲	48
次	44▲	2▽	1	47
平気	46▲	0▽	1	47

表4の10種類の名詞についてカイ二乗検定をおこなったところ、ゼロ形、ダ形、デス形の出現数間に偏りが認められた ( $\chi^2(18)=310.789, p<.01, \text{Cramer's } V=0.239$ )。残差分析の結果も示した。

名詞については、「本当だ」「駄目だ」のダ形使用が比較的目立つ。「本当だ」「駄目だ」は、会話の中にあっても三枝(2001)の言う「自分に向けた発話」と解釈されやすいことが要因と考えられる。「自分に向けた発話」の判定は難しいが、「あ、本当だ」が64件、「あつ、本当だ」が16件あり、これだけでもダ形の24.17%を占める。

同じく「駄目だ」についても、「あ、駄目だ」7件、「ああ、駄目だ」2件、「もう駄目だ」が12件、「全然駄目だ」が4件など「自分に向けた発話」と見られる例が見られた。ただ、いずれにしても実数ではダ形の方が多いということも事実である。

#### 5. J-TOCCにおける男女別の傾向について

本節では、120ペアのうち「男性-男性40ペア」「男性-女性40ペア」「女性-女性40ペア」と男女各120人ずつの統制が取れたJ-TOCCを用いて、主に「ダ形は男性が使う」「形容動詞語幹+よ(以下、ゼロヨ形)は女性が使う」という先行研究の主張を検証していく。

表5 J-TOCCにおけるダ形とゼロヨ形

	ナ形容詞ダ形	ナ形容詞ゼロヨ形	名詞ダ形	名詞ゼロヨ形
男性	96	21	80	125
女性	143	12	79	104

J-TOCCによる調査では、名詞ダ形を除き「ダ形は男性が使う」「ゼロヨ形は女性が使う」とは反対の結果となった。ただし、ナ形容詞ダ形の男女計239件のうち209件までが「嫌だ」である。「嫌だ」の占める割合を性別で見ると、男性78/96(81.25%)、女性131/143(91.61%)であった。「嫌だ」に限ると、やや女性の使用率が高かった<sup>10</sup>。

(5) 2F: まあ、土日とかでもいいけど、休みだから。

1F: ああ、そうなの。いいね。土日休みで、9時5時いいね。

2F: うん。

1F: それはいいわ。

2F: ってことになってるけど、実際、どうなるかは分からないね。

<sup>10</sup> 「嫌だ」の発音形については、「イヤ」が129件(男47/女82)、「ヤ」が80件(男31/女49)で男女の大きな偏りはなかった。ちなみにナ形容詞ヤ形における「嫌や」は、88/162(54.32%)で発音形は全て「イヤ」であり、「ヤ」はなかった。

1F: まあ、分からない、それが社会のね、うん。社会の荒波に乗っていかなきやいけないもんね。 大変だ。

(J-TOCC : E312-04)

「嫌だ」以外の使用は男性 18 件、女性 12 件と少なくともはあったが大きな偏りはなく、(5)のように女性の使用も見られた。ナ形容詞ゼロ形については、男性による発話「チャリは大変よ」「親父、結構グローバルよ」など、男性でも自然な使用が多く観察された。

## 6. J-TOCC における話者個人別の分布について

5 節の表 2 において、既に J-TOCC におけるゼロ形とダ形の分布は示している。しかしこれだけでは、話し言葉の普通体においてゼロ形、すなわちナ形容詞語幹単独用法が無標であるとする主張には弱いと考えられるため、話者個人別の分布を掘り下げてみたい。

CEJC は被調査者の居住地が 90%以上関東に偏っているため、西日本方言の影響が少なかった。一方、J-TOCC は 240 ペアのうち 120 ペアを西日本で収録しているため、方言の影響が大きい。そこで、表 6 ではダ形の代替として使われる可能性のあるヤ形（「大丈夫だ」→「大丈夫や」）を集計に含めた<sup>11</sup>。

表 6 J-TOCC における話者個人別分布

	ナ形容詞				名詞			
	ゼロ形	ダ形	ヤ形	ダ+ヤ	ゼロ形	ダ形	ヤ形	ダ+ヤ
使用者率	98.33%	40.42%	32.50%	68.33%	100.00%	42.08%	54.17%	80.42%
平均頻度	7.42	1.00	0.68	1.67	47.52	0.66	3.12	3.78
標準偏差	5.21	1.87	1.31	2.07	21.46	1.02	4.81	4.74

表 6 を見てみると、ゼロ形とダ形+ヤ形を比べても使用者率、平均頻度共にゼロ形が高い。この傾向を確認するために、話者 240 人のゼロ形とダ形+ヤ形の差について対応のある  $t$  検定をおこなったところ、ナ形容詞 ( $d(239)=17.213, p<.01, r=.219$ )、名詞 ( $d(239)=33.922, p<.01, r=.420$ ) とともに有意な差が得られた。

この結果は、ダ形に「嫌だ」と「自分に向けた発話」が含まれていたとしてもなお、話し言葉の普通体においてはゼロ形、すなわちナ形容詞語幹単独用法が無標であるという主張を支えるものと言える。

## 7. まとめ

本稿では、話し言葉における普通体応答において、ゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱うべきであるという主張について、コーパスによる量的調査によって検証してきた。日本語教育文法としては、「自分に向けた発話」と「他者目当ての発話」及び、男女での使用傾向差（権威性の差）があるとしても、「嫌だ」を除けば全てゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱った方が効率

<sup>11</sup> ダ形もしくはヤ形のいずれかを使用していたのは辞書詞では 153 人、名詞では 155 人、両方使用していたのは辞書詞では 11 人、名詞では 38 人だった。ちなみにヤ形のみを使用していたのは辞書詞で 67 人（うち 2 人が東日本話者）、名詞で 92 人（うち 7 人が東日本話者）と影響が少なくないことが確認できた。

的であると結論づけられ、日本語教育文法として「だ」は省略という説明は妥当ではないと言える。

野田 (2005:6) は「体系主義の悪影響というのは、日本語教育での必要度とは関係なしに、体系的にまとめやすい部分を重視し、体系的にまとめにくい部分を軽視する傾向である」と述べた。これを本稿の例に当てはめてみると、形態論としてナ形容詞の基本形が「大丈夫だ」であるので、話し言葉においても丁寧形「大丈夫です」の普通形は「大丈夫だ」と決め込んでしまっていないかという、日本語教育文法としての見直しを試みたということになる。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 金水敏 (2023) 「役割語のジェンダーとパワー」『社会言語科学』26(1), pp.37-48, 社会言語科学会.
- 国立国語研究所「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究『日本語日常会話コーパス』の概要」(<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/design.html>) 2024年6月16日参照
- 今野弘章 (2012) 「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』141, pp.5-31, 日本言語学会.
- 三枝令子 (2001) 「だ」が使われるとき『一橋大学留学生センター紀要』4, pp.3-17, 一橋大学留学生センター.
- 清水泰行 (2015) 「現代語の形容詞語幹型感動文の構造：「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として」『言語研究』148, pp.123-141, 日本言語学会.
- 荘司育子 (1992) 「疑問文の成立に関する一考察：「デス」という形式をめぐる」『日本語・日本文化研究』2, pp.39-50, 大阪外国語大学日本語講座.
- スリーエーネットワーク (2005) 『みんなの日本語初級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語初級 I 第2版』スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (2016) 『みんなの日本語初級 I 第2版 教え方の手引き』スリーエーネットワーク.
- 富樫純一 (2006) 「形容詞語幹単独用法について：その制約と心的手続き」『日本語学会 2006 年度春季大会予稿集』pp.165-172, 日本語学会.
- 中俣尚己・太田陽子・加藤恵梨・澤田浩子・清水由貴子・森篤嗣 (2021) 『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』『計量国語学』33(1), pp.11-21, 計量国語学会
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 7』くろしお出版.
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.1-20, くろしお出版.
- 李明熙 (2011) 「話し言葉における名詞文の文末形式の使い分け」『日本語／日本語教育研究』2, pp.207-220, 日本語／日本語教育研究会.